

あ と が き

本校の教育に課せられた大きな課題である発達の遅れや障害の偏りに対応する教育をめざして、「からだづくり」という観点から取り組んだ二ケ年の実践を、研究紀要第11集としてまとめました。

一人ひとりの子どもたちが、学習や生活の中で「生きて働く力」となるものを着実に身につけ、太らせ、生き生きと活動できるようにさせたい。そして、そのことが、将来の社会的自立につながる変化（発達）を生み出せるような、そんな実践的研究でありたいと出発した研究であります。

具体的な子どもの姿を見つめ、働きかける中で、「からだ」とは、心理的・態度的な面を含めた「からだづくり」とは、「からだづくりを通して」めざすものは、評価のためのメジャーは、等論議しながら研究の構想をたて、日々の指導をとおして研究実践を重ねてきました。そして、研究をより科学性のあるものにするため、客観的なデータを積み重ねて、子ども一人ひとりの理解を深め、それぞれの課題にせまる方法も模索してきました。また、小・中・高の段階的発展性も十分考慮して、研究実践に努めたつもりであります。

この二年間、学部毎に、あるいは全校をとおして、何回も崩しては積みなおした取り組みを、一応まとめて発表するにあたり、本当に課題が達成されたかと問い直してみますと、一抹の不安を感じます。

しかし、このつたない研究実践は、今後更に深めてまいりたいと考えておりますので、関係の方々のきびしいご批判やご助言がいただければ幸甚に存じます。

末尾になりましたが、この研究を進めるに際しましては、ご指導を賜りました関係各位に感謝申し上げます。特に、鳥取大学教育学部助教授渡部昭男先生には、この研究に取り組んだ最初から多大の指導助言などいろいろなお力添えをいただきました。心から厚くお礼申し上げます。